

人生哲学的寓話。The Richman in Babylon

はおぬしたちが「富を増やす法則」を学ぶことを怠ったか、学んでもそれを守らなかったか、そのどちらかであるのだよ。

去年稼いだ金のうち、どれくらい残っているというのだ。愚か者めが。おまえが支払いをしている相手は、すべて自分以外の人間だ。まだ分からぬのか。おまえは他人のために汗水たらして働いているのだ。食べ物と着るものをくれる主人のために働く奴隷と変わらぬのだよ。もしおまえが稼いだものの十分の一を取っておいたなら、はたして十年でどのくらいになっているのか分かっておるのか』

『一年間に稼ぐだけの金額です』

『アルカドよ、おまえは教訓からしっかりと学んでおるの。おまえはまず初めに、稼げる範囲内で生活することを学んだ。次に、自分自身の経験に従って、有能な人間に助言を仰ぐことを学んだ。そして最後に、金を自分のために働かせることを学んだ。おまえは「金の稼ぎ方」、「稼いだ金の守り方」、「稼いだ金の使い方」を自ら会得した。

第一の知恵 財布を太らせることから始めよう

第二の知恵 自分の欲求と必要経費とを混同するべからず

第三の知恵 貯めた資金は寝かさずに増やすべし

人間にとって財産とは、財布の中に持っている現金ではありませんぞ。しっかりした定期的収入こそが財産なのです。財布の中に絶えず流れ込み、いつも中身をふくらませてくれる金の流れこそが財産なのです。

第四の知恵 損失という災難から貴重な財産を死守すべし

第五の知恵 自分の住まいを持つことは、有益な投資と心得よ

第六の知恵 将来の保障を確実にすべく、今から資金準備に取りかかるべし

第七の知恵 明確な目的に向かって、自己の能力と技量を高め、よく学び、自尊心を持って行動すべし

自尊心のある人間であれば、次のことを守らなくてはなりません。

- ・借金は能力の及ぶ限り、なるべく早く返すこと。
- ・支払い能力を超える買い物はしないこと。
- ・家族の面倒を見て、家族から慕われ、尊敬されるよう努めること。
- ・遺言書をきちんと作っておくこと。神に召されたとき、その遺産配分は、適切で、しかも各人の名誉を重んじる形でなされるようにしておくこと。
- ・親しい人には思いやりのある態度で接すること。運命の巡りが悪く、傷つい

いたり打ちのめされたりした人へ同情を寄せ、無理のない範囲で援助すること。

ですから空っぽの財布を太らす「第七の知恵」とは、次のとおりです。

自らの能力を開発すること。

仕事の技量を高めること。

勉強して考えを深くすること。

自尊心を持って右ページの五項目のような行動を取ること。

そうすればおのずから望みを叶えるための自信がついてくるのです。

「五つの黄金法則」

- 一、将来の資産と家族の財産を築くため、最低でも収入の十分の一を貯めるならば、黄金は自ら進んで、しかもだんだんとその量を増やしながらやってくるだろう。
- 二、貯まった黄金がさらなる利益を生むような働き口を見つけてやり、家畜の群れのごとく増やせる賢明な主人となるならば、黄金は勤勉に働いてくれるだろう。
- 三、黄金の扱いに長けた人々の忠告のもとに黄金を投資するような慎重な主人であれば、黄金はその保護のもとから逃げようとはしないだろう。
- 四、自分のよく知らない商売や目的、あるいは黄金を守ることに長けた人々が認めないような商売や目的に使われる黄金は、その人間から逃げてゆくことだろう。
- 五、あり得ないような莫大な利益を生ませようとして、詐欺師の魅力的な誘いに従ったり、あるいは自らの未熟で非現実的な欲望に頼ったりするような人間からは、黄金は逃げてゆくことだろう。

黄金の「七つの知恵」

- 第一の知恵——財布を太らせることから始めよう
- 第二の知恵——自分の欲求と必要経費とを混同するべからず
- 第三の知恵——貯めた資金は寝かさずに増やすべし
- 第四の知恵——損失という災難から貴重な財産を死守すべし
- 第五の知恵——自分の住まいを持つことは、有益な投資と心得よ
- 第六の知恵——将来の保障を確実にすべく、今から資金準備に取りかかるべし
- 第七の知恵——明確な目的に向かって、自己の能力と技量を高め、よく学び、自尊心を持って行動すべし

お金を稼いで、こういう気持ちになったことはあるだろうか？

ロダンと金貸しメイソンの会話が続く。

ロダン、帰る前に担保箱の蓋の裏に刻みつけておいたこの言葉を読んでみたまえ。これは借り手にも貸し手にも当てはまることだからな」
そこにはこう刻まれていた。

——より慎重な選択こそが、大きな後悔から身を救う。

「ロダン、これは検討するだけの価値がある話だな。金は金を持つ者に責任をもたらし、仲間内の地位を変えてしまう。金を持った者は、その金を失くしはしないか、騙し取られはしないかと不安になる。金には力があり、金を持った者は良いことができるようになると感じる。同時に、金のせいで、多くの善意からしたることなのに面倒に巻き込まれることだつて起きる。」

金貨が五十枚！ バビロンの槍職人ロダンには、こんな大金が自分の革財布に入ったことは一度もなかった。これ以上ないほど気前のよい国王陛下の宮殿から、ロダンは浮き浮きと道を下つて来た。ベルトに吊るした財布からは、一歩ごとに金貨がちやりんちやりと陽気な音を立てている——こんな美しい音はこれまで聞いたことがなかった。

金貨が五十枚！ それも全部自分のものだ。こんな幸運、信じられない。いい音を立てているこの金色の貨幣にはどんな力があるのだろうか。欲しいものは何でも買える。大きな屋敷、土地、牛や羊、駱駝、馬、戦車、何でもだ。

「どうやら分かってきました。懸命に働いたおかげでおじい様にはたくさん友人ができて、皆がおじい様の勤勉さを尊敬し、成功がもたらされたのですね。懸命に働いたおかげで、ダマスカスであれほどの栄誉を受けることができた。懸命に働いたおかげで、おじい様はぼくが大好きな宝石や指輪を手に入れることができたのですね。それなのに、ぼくといったら働くことは奴隷にしかふさわしくないと考えていたなんて」

「人生には楽しみがたくさんあるものじゃよ。そして一つひとつの楽しみには、それにふさわしい身分がある。働くことが奴隷専用のもではなくてわしはうれしく思う。もし労働が奴隷だけのものならば、今のわしは一番の楽しみを取り上げられることになるのだからね。確かにわしにもいろいろの楽しみはあるが、働くことの代わりになるものなど何も考えられないんじゃないよ」